

## 第17回教育改革シンポジウム

## 基調講演へのコメント

塩 出 彰  
大阪市立大学名誉教授

SHIODE, Akira

ただいま紹介にあずかりました塩出と申します。

よく知っている顔もお見かけしますけれども、2008年、平成20年3月に退職いたしましたので、もう2年半たっております。最近の市大のいろんな議論については非常に疎いので、もうそんな話は済んでいると、おしかりを受けるのではないかと思います。市大に26年在職しまして、その前に9年ほど別の大学で一般教育を担当しておりました。市大では平成6年に新しいカリキュラムが発足して共通教育の体制が新しく変わったわけですが、その準備段階から1年半、カリキュラム委員会の委員を文学部から出て、いたしました。その当時カリキュラム・共通教育について評議会選出の委員が4名カリキュラム委員会に入り、そのうちの2名がカリキュラム委員会の委員長、副委員長になっておりました。

その評議会選出の委員を平成8年から11年まで4年間やらせていただき、その4年間の経験の中で、単なる推薦委員というような形でカリキュラム改革等にかかわるといえるのは、いろんな調査等、データを調べなければなりませんし、継続性という点からも、ちょっと無理ではないか、それよりは、そういうこと自体が研究成果にもなり、積極的にデータ等の収集、あるいは他大学へも調査等に行けるような立場の方が専任としておられたほうがいいのではないかとということで、現在の大学教育研究センターのベースになるようなものの提案をさせていただきました。そのときは一応学長ヒアリングまでありましたが、要らんと言われて、あえなくぼしゃりましたけれども、その後数年して現在のセンターが設立されることになって、我々の提案も多少生きたのかなと思っています。

その後、平成15年から16年まで教務委員としてやは

り共通教育の運営委員長と副委員長を、1年ずつ務めさせていただいたという、合わせてみれば7年ちょっとぐらいの経験ですので、殊さらここへ出て皆様にお話するような資格があるのかどうか、ちょっと自分自身でも悩んでおります。しかも、学士課程教育ということだったので、その範囲だけコメントすればいいのかと思っていましたら、先ほどまで寺崎先生のお話を聞いていますと、大学院教育まで入りましたので、非常に気の重いことになっております。私としては、私自身共通教育にかなりかかわってきましたので、その辺を含めて3点、市大の問題を中心に少し話させていただきたいと思います。

第1点は、大学の入口と出口の問題について少しお話ししたいと思っております。それから第2点目として、その入口と出口の間にある4年間の教育、つまり学士課程教育の問題について、それから第3点目は、寺崎先生のお話しになったFD、SDの問題について、もう1つSDと言えるものがあるのではないかと、話をさせていただきたいと思っております。

1つは、少子化、ユニバーサル化に伴う入口の問題、それから、先ほど9月23日ごろに、日経新聞の記事で、三井物産とか三菱商事など大手商社が大学生の新卒者の採用活動時期をおくらせるように呼びかけるとい、そういう申入れをしたということが出ていました。この出口の問題は我々、個々の大学だけではどうしようもないというところはありますけれども、大きな問題としてあるのではないかと、入口・出口の問題として申し上げたい。

入口の問題としては、これは寺崎先生のご指摘になったとおりのことでありますけれども、ユニバーサル化と少子化とが重なってきて、高校との連携の問題が

出てきたわけで、この場合に、リメディアルというようにことが問題になっております。結局本学として早急に検討すべき事柄というのは、それぞれの学部が大学教育、学士教育の出発点としていかなる学力を前提にするか、そのところをはっきりさせる必要があるのではないか。そうしないと、リメディアルがどこまで必要であるかということも明らかになりませんし、それから、アドミッションポリシーを立てる上でも、やはりそれぞれの学士教育の中で一体どれだけの学力を出発点として大学での教育を始めるのかということをはっきりさせる必要が出てくるだろうと。それは、後の2点目でお話する4年間の教育の問題ともつながってまいります。そういう意味で、入れるところでもうちょっと明確な議論をした上でないと、さまざまな入試をやって、いろんな学生を入れていくということだけでは、大学の責任というのは十分に果たしてないということになるのではないかと思います。その上で、それに満たない学生を入学させているとすれば、どうやってそこまで引き上げるかという問題、それはまた初年次教育とは違った問題にもなってくるかと思っています。

それからもう1つ出口に関しては、皆さん共通してお感じになっていることだと思いますけれども、大学というのは社会に学生を送り出すということが1つの使命ですので、当然、学生の就職支援というようなことは大学として考えるべきことでありますけれども、現在のように非常に就職状況が厳しいという状況がありますが、それ以前から、学生のほうがどんどん就職活動の時期を早めていって、学士教育の非常に重要な完成に教育をしなければならない4回生、あるいは早い場合は3回生のころからうろうろ始めて、就職活動で授業に出られませんでしたと言ったらそれで通るという雰囲気が非常に強い。それから、もう就職が決まっているのでこの単位を落とされたのでは困ると言われると、とてもじゃないけど、ほとんど授業にも出てない、答案を見ても十分ではないのにと思いつつ、甘くならざるを得ないという実情があるのではないかと。そして、1回甘くすると、公平性からすると、ほかの4回生以外の者にも甘くなってしまうという形で、授業の質そのもの、卒業生の質そのものを低くす

る傾向にあるのではないかと。そういうことから考えると、大学自体が企業に対してもう少し強く申し入れる何らかの形を考えないと、大学教育が4年どころではなくて3年とか3年半ぐらいで終わってしまうことになりかねないところがあるのではないかと考えております。その点、これは市大に固有の問題ではありませんけれども、議論が大学の中で必要ではないかと思えます。

それから、一番大きな問題は、その間に挟まる4年間の学士課程教育の問題でありますけれども、私はむしろ少し、専門教育に比べていわゆる教養教育といえますか、全学共通教育というものが、カリキュラムの面でも、それを支える面でも少し弱いのではないかと。この話をしようと思っていたのですが、寺崎先生のお話を聞きますと、サブジェクト中心ではなくてコースである。そういう話からすると、私自身、文学部の哲学教室に所属しておりましたけれども、学部の専門教育自体も学部のと言わないほうがいいのでしょうけれども、専門教育自体ももう一回、そのカリキュラムというものを根本的に見直す、コースという視点から見直していく必要が出てくるのではないかと。

ただ、やはり、専門教育の場合はちゃんとした学部組織、教授会、それぞれの教室なり専攻という教員組織があって、それぞれそこに先生方は帰属意識も非常に強く持っておられるので、議論が非常にしやすいところがある。それに対して、やはり教養教育といえますか、うちでは全学共通科目と言っておりますけれども、それに関して言うと、ある科目群に関しては、それを担当される教員が一つの学部組織に集中的にいられて、私は大学教育検討委員会なんかで教科会議等にできるだけ出させていただきましたが、非常に活発で真剣な議論がなされている教科会議もございましたけれども、必ずしも全部がそうではない。カリキュラム改善とか、次年度のカリキュラムを考える基本的な単位というのは教科会議だろうと思いますけれども、出席も非常に悪いところがあります。それはなぜかという、教授会はちゃんと開催できるように日程が保障されているのに対して、教科会議になると、教科会議の議長の権限もはっきりしませんし、それから、授業とか学部の委員会、あるいは全学の委員会の合間を縫

って時間をつくるというような形でしか運営されてないという問題があると思います。

したがって、専門教育に比べて確かに全学共通科目の単位数というのは小さいとはいえ、大体4分の1から5分の1の要件単位が学生に課されている。しかも、入学生の学生のモチベーションからすれば、やはり専門教育については少なくともこういうことをやりたいと思って多くの学生が入っているわけですから、基本的なモチベーションがある専門教育に対して、全学共通科目に対するモチベーションの比重は相対的に低いわけです。そうするとカリキュラム等でモチベーションを高めるようなよほどの工夫なしにはなかなか学生の自由な学習を保証できないし、そういう形でモチベーションが低くなるということは、市大の教育そのものに対する失望感というものも深くすることになる。これは例えば電気製品でも、いくらい部品を使っても、弱い部品が壊れてしまえば使えなくなるのと同じで、やはり弱いところを強くすることが大学全体の教育力を高めることになるのではないかな。そういう意味で、全学共通教育についての運営システムのもう少し強化ということが必要ではないかな。そのことが学生の、ひいてはモチベーションを高めることにもなるだろうと思います。

それから、そういうことと関連しますと、退職してまた2年後にこのような話をさせていただくので、全学共通のカリキュラムを見せていただきましたけれども、思ったより減ってない、私が退職するときにあった科目等が科目数においてもたくさん出ているわけですが、ただ、私が在職当時から思っていたのは、共通教育について言うと非常にカリキュラムが多様化してたくさん出ていますけれども、まさに寺崎先生のおっしゃったような、コースといいますか広がりがありますけれども、学生がどういうふうにそれを取っていけばいいのか、そして、それを取ったときに、そのカリキュラムでどういうことが期待されているのかについて、やはり明確になってない。さっき言った会議システムの弱さということもあって、それについての議論が教員の間で十分になされていないし、仮に十分にしたとしても、その委員会の決定権等がはっきりしないので、全学のカリキュラムにそこでの検討結果と

いうものが反映されないという、そういう形になっていると思われます。

これは逆に言うと、カリキュラムの改善に関して、現場からの改善の声のカリキュラムに反映されないという結果になりますし、それは同時に担当者の士気も損なうことになる。もう少し共通教育のカリキュラムについては運営組織を、学部並みとは言いませんけれども、学部等に等しいような少し強いものになるよう全学で支えていく必要があるのではないかな。それがまさに寺崎先生がおっしゃったように、専門教育と教養教育から成り立つ全体的な大学としての学士教育力を高めるのではないかな。確かに専門教育も専門だけ教えるわけではなくて、学生の教養にも役に立ちますけれども、主たる目的はやはり専門の知見を授けるということにありますから、そういう意味での目的の明確化ということからも、カリキュラムをもう少し体系化する、そして学生に見えるような形で、少なくとも学生の自由にとどこまで任せるかということとはまた議論の余地があるかと思いますが、大学として、なぜこういう科目を出しているのか、そして、どういう履修が望ましいのかということについて、学生がわかるようなカリキュラムあるいは指針を明確に示す必要がある。学生は「パンキョウ」と呼んでいますけれども、非常に軽視する、しかも失望したというような、そういうことが出てくるのではないかな。それは市大にとって決して得にはならないのではないかなと思います。

第3に、もうあまり時間はありませんけれども、2つのFDの外に、FDにもう1つあるのではないかなという、ちょっと余計なちゃちゃを入れるようなことを申しましたけれども、それは、FDというのはファカルティ・ディベロップメントですし、SDというのはスタッフですけれども、もう1つ、寺崎先生もちょっとお触れになられたと思いますけれども、最近、学生というのを顧客と扱って顧客満足度というような調査といたしますか、そういう扱いをする場合がありますけれども、学生も大学の重要な教育にかかわる構成員であると考えべきではないかな。そういう意味において、大学の教員というのは割合偉そうにしているものから、職員の方に対して非常に失礼な態度をとったりして、逆に、寺崎先生がおっしゃったように、職員の

方から反撃を食ったりするわけですが、更に学生に対してはもっと横柄な態度であったのではないかと。むしろ学生を自分たちの教育の重要な構成員としてとらえて、大学の教育活動、さまざまな活動の中に学生を積極的に取り入れていくということは、学生自身の大学へのコミットメント、あるいは誇り等を高めることになり、結局それは学生の受講態度、教育を受けられる力というものを高めることになるのではないかと。

それは例えば、私が検討委員をしていたときに、関西のある私立大学のこういう催しに出かけていったときに、職員の方は言うに及ばず学生の方が非常に積極的にこういう委員会や、研究会等の補助的なスタッフとして参加し、更に学生の方自身も、自分が受けている教育をどう思っているかというようなことを研究会で報告される、ああなるほど、一種の三位一体といいますか、教員、職員、学生の力を最大限に引き出すということが大学にとって非常に重要なことだなというふうに感じた次第であります。

私が在職する最後の頃に、文学部・文学研究科が教育促進支援機構という機構をつくりました。これは最初は職員、教員が少しお金を出すというような形で基金をつくりましたが、新入生に対するガイダンスであるとか、合宿して大学についてのさまざまな話をするとかいうようなことに、学生自身が企画をつく

るし、実際に参加をして、また来年度どうすべきかということを考えていくという、いわゆるPDCAサイクルとか言われているようなものを学生自身がやっております。受講した学生のほうもそれを受けたおかげで、大学文学部での4年間の学生生活に非常に役に立ったというようなコメントが出ておりますし、これについては井上先生が前に報告されたと思います。そういう形で学生を、大学の教育活動の中に積極的に取り込むということが、これは非常に現実的な話をするのであれば、お金も人的資源も限られている中で、学生の力を活用するということは大学にとって好ましいことです。学生自身にとってもこれは、文学部は非常に就職に一番遠い学部というのが一般的な印象でありましょうけれども、そういう活動の経験というのは、学生が外部、外に出たときに役に立つ教育であって、社会人としての能力を高めることにもなるかと思えます。積極的に、大学全体として学生をいかに大学の教育活動の中に積極的に取り込んでいくか、一体化していくかということを考えるということが、今後の市大を、学生にとって、それから受験生にとって魅力のある大学にするということになるのではないかと考えております。

もう時間も来たようですので、これで一応終わらせていただきます。(拍手)



第17回教育改革シンポジウム

## 質疑応答・ディスカッション

【司会】では、質疑応答・ディスカッションに移りたいと思います。ちょっと時間が超過しながら進んでおりますので、まずは、コミュニケーション・ペーパーにお書きいただいたことを司会のほうでまとめて、寺崎先生と塩出先生へのご質問ということでこちらからお伺いするというような形にさせていただきます。それに両先生からご返答いただき、またその後でフロアの方からもご質問いただければと思っております。

多くが寺崎先生へのご質問ですけれども、塩出先生と寺崎先生と両方あての質問もございます。

まず、塩出先生コメントの最後にあった、学生のFD参加についてどのようにお考えですかという質問があります。これは寺崎先生へのご質問です。

それからお二方に対して、「FDの最終的な対象という目標が必要ではないか、だれをどうするのか、または、だれがどうなるのかなど、どこに目標を置いてFDがなされる必要があると考えるか」というご質問があります。

さらに寺崎先生にあてての質問です。これは大学とは何かということに関するご質問と言えるかと思うのですけれども2つあります。1つは、「寺崎先生のお話の中で、大学の専門学校化を求めておられるように聞こえますけれども、もしそうならば、大学と専門学校の違いをどこに求めていくべきですか」というご質問。もうひとつは、「人材養成機関としての高校、高等学校と大学との違いはなくなりつつあると考えてよいのでしょうか」というご質問がございました。

それからあとは、幾つか、結構たくさんあったのですけれども、学生の学力とか学習姿勢とか、その辺にかかわる質問とまとめることができるかと思います。「例えばわかりやすい教育をすとか、そういうことが言われるようになると、学生が受け身になってしまうのではないかと心配です」とか、「目標を明確

にしてやるというのはいいが、そうなった場合にいわゆる成績の低い学生、学力の中位、下位の学生は不利になってしまうのではないか」といった質問がありました。あとは、先ほどのFDへの学生の参加とも重なる部分があるかもしれませんが、学生の、またさらには教職員のコミュニケーションをとろうという姿勢がなかなかなくて、いろいろ大変なのではないでしょうかというご質問もありました。

それから、英語での講義ということに関しては、教員の資質だけでなく、学生の選抜の問題も出てくるのではないかとという質問もあります。要するに、入ってくる学生に大学が教育したいことと、入ってくる学生との間の一種のマッチングがどの程度現実としてうまくいくのだろうかというご質問かと思えます。

それから、最後に1つ、先ほどの大学とは何かのほうに入れたほうがよかったのかもしれないのですが、学士課程教育の問題は何でしょうか。つまり、いろんなことが言われていますけれども、何を目的として現状を改善するための対策を立てる必要があるかというご質問をいただいております。

早口でいっぱい挙げてしまいまして、申しわけございませんでした。寺崎先生と塩出先生、どちらからでも結構ですので、まずお答えやコメントをいただけたらと思います。よろしくお願いいたします。

【寺崎】いろいろとたくさん寄せていただいて恐縮です。

先ほどの、大学の専門学校化をどう考えるか、というお話ですね、ご心配は非常によくわかりますが、私は、専門学校的に教えていくことが大事だと言ったのではございません。むしろ、きょうお話ししました資料 番というのを見てください。いろんな大学問題の最近本が出ていますから、その中から気に入った文を引っ張り出してノートにつくっているんです。

例えば、私が非常に感心する大学教育論というのは4番ですね。ホワイトヘッドという、科学哲学者として有名ですが、彼の書いた論文は私にとっては不可欠の大事な論文でございます。彼は、「大学は知識を伝達する場所か？」と掲げているんですね。イエスと彼は答えています。イギリスの学者にしては珍しい言い方だと思います。「ただし想像力に満ちたやり方で伝達する」と言っているんです。imaginativelyという言葉を使っております。これを私は「想像力に満ちたやり方で」と訳したのですが、いろんな方がいろんな訳をしておられまして、それぞれの考え方や思いを託して訳すことができる言葉だと思います。

ただ、ここで彼が言いたかったことは、大学は知識を伝達する。情報を伝達する。しかし、それをやるときに学生たちの想像力に訴えるやり方で、あるいは学生たちの想像力をかき立てるようなやり方で教える。こういう意味だと思います。別のところで彼は言っています。大学というところは、世代の違う人たちがお互いの想像力を介して知識や情報を伝達し合うところである。私は、これが一番大きい特質なんじゃないかというふうに思っております。想像力に満ちたやり方ということは、単に資格取得に向けて教え込んでいくとか、ましてや注入していくとかいうのとは異なるやり方を示唆しているのではないかと思います。

ちなみに、この講演は、The Aims of Education「教育の目的」という本の中に入っていますが、「大学とカレッジの機能について」という講演の一部なんです。彼が語ったのはいつかということ、1929年なんです。この年に、彼はイギリスの科学哲学者でしたけれども、ハーバードに呼ばれて滞在しております。そのときに呼ばれて語っているんですね。どこが呼んだかということ、ハーバードを中心とするビジネススクール全米協会というのができた、その発会式のときの記念演説なんです。

ビジネススクールというのは、今の言葉で言えばソーシャルニードにこたえるためにつくられた、いわば知識を教える場所ですね。そういうところの協会創立総会に呼ばれながら、しかし、彼ははっきり言っています。“ビジネススクールというのは恐らくブラクティカルな面を嫌う人から見れば大学の邪道と見られる

組織ではなかろうか。しかし、自分に言わせると、ビジネスという世界は実は最も想像力豊かな世界なんだ、ビジネスという活動を通して我々は近代をつくってきたし、また、その活動の背後に、あふれるようなイマジネーションが働いている場所だ、そういうところを大学が教えるというのは極めて大事なことで、それを教える大学はイマジネーションに満ちたやり方、すなわちimaginativelyなやり方で大学教育をすべきなんだ”と。これは、20世紀では出色の大学教育論ではないかと絶えず思っております。邦訳は幾つかありますけれども、本当は英文でお読みになるほうがいいんじゃないか。とてもわかりやすい、いい英語が使われていると私には思われますね。

私は思うんですけど、イマジネーションをどうやって高めていくかという方法です。これが問題だと思います。そのときに参考になるのが、最近、高等学校以下の教育で注目されている学習のやり方なんです。1つは、まず「認識」。認識を形成していくという、これは大事なことでございます。特に高校以下は教科で分かれていますから、社会科学的な認識とか、あるいは理科学的な、自然科学的な認識があります。認識の形成を高校以下の教育の大部分は基本に置いているわけですね。その次に、認識力をつけるだけではなくて理解させなくてはだめだと。さらに知っているということと、わかるということは違うじゃないかという方たちは、認識のもう1つ先に「納得」というのを置きました。社会科学的理解にもとづく納得、自然科学的理解にもとづく納得、これらはもっと深いものです。

しかし、最近もう1つ注目されているのは体得という方法です。行動することによって、活動することによって学ぶ。この体得という方法は恐らく今後、大学の教養教育その他でも極めて重要になってくるのではないのでしょうか。行動することによって学ぶ。この考え方の基本は中国にあるようですね。中国の宗教的ないわゆる修行というようなものともかかわっている。体で知ることです。この体得というのを、大学の中に組み込むと随分違ってくる。

これは私どもが、私は教育学部の教授でしたけれども、やっぱりやっていて非常によくわかることでした。いろんな体得の仕方があります。私は教育史の教授で

したけれども、史跡のあるところへ連れて行って、そして一緒に、どうやってこの建物はつくられたんだろうか、何のためにつくられたんだろうかと考えるだけでも、教室で座って学ぶのと全く違うんですね。ましてや、ほかの領域だともっともっと違います。ですから、そういう認識、理解、納得、体得と、この4つのサーキュレーションを授業の中で実現していくという、そういう方法は、十分にイマジネーティブな教え方なのではないか。恐らく大学で最もよくできるやり方ではないかというふうに思っております。

【司会】ありがとうございます。

それでは、塩出先生からもお願いできますか。

塩出先生と寺崎先生、両方ということで、FDの最終的な目標とは何なのかというものがございました。それ以外にFDに関連する質問が幾つかありましたので。

【塩出】FDの最終目標、目的ということですね。

【司会】そうですね、最終の目標、だれが、だれを、どのようにすることがFDの目標なのか。例えば学生を育てること、どういうふうに育てることなのか、それ以外にもあるのかもしれませんが、そのようなことです。

【塩出】FDということを考えた場合、寺崎先生もご指摘になったと思いますけれども、比較的教員個人に対して何か求められることが現在まで多くの大学、多くの場合多かったように思いますけれども、FDということを考えると、個人のレベルから大学全体、組織全体の問題まで広がるのではないかと思います。むしろ私は、今後考えていかなければならないのは、組織として大学の教育力をどうやって高めていくかという問題ではないか。それをなおざりにして、個々の教員にばかり何かを求めるということは、非常に教育現場を矮小化してしまうことにならないかと思っております。

そして、私が組織全体としてということを考えたのは、さっきもちょっと共通教育に関して言及させていただきましたけれども、組織として共通教育のカリキュラムがこれでいいのか、あるいはカリキュラムの運営組織というものがこれでいいのかということを考えることなしに、共通教育の、あるいは専門教育も

そうですね、改善というのは最終的にはあり得ないのではないかと。特に共通教育の場合は、申し上げましたように、その運営基盤が非常に弱い。組織的にも保証されていないところがありますので、そこをきちんとしないといけない。本学の共通教育も、私は今回見せていただいて、私が退職するときとあまり変わりがなかったのですけれども、それは平成6年度にでき上がったカリキュラムとほとんど変わらないということなんです。

ところが、本学の教員の数等を考えますと、あるいは共通教育にかかわっている専任の数考えた場合には、現在圧倒的に減っているわけですね。そうすると、そもそも平成6年にできたカリキュラムが完全なもので仮にあったとしても、それをこれだけの足りない人数でちゃんと支えられるわけがないんですね。したがって、現在の体制の中でどれだけの教育ができるのかということも考え直さなければならぬし、その中で学生に何を市大としては共通教育で教えたいのかということを明確にしなければいけないし、そういう作業をするのにもその運営基盤等をはっきりさせ、その権限も十分なものを与えないと、議論だけして、いつまでたっても決まらない、議論している人間のやる気も失わせてしまいますので、これは結局市大の教育力ということをして落してしまうということになるのではないかと危機感を私は在職中から持っていました。

共通教育の委員長等をさせていただいたときに、全学共通教育というのは現在、全学に共通に提供されている科目ということで定義されていますけれども、むしろ全学が提供する科目という形で、全学の教員がコミットするというような意識を持たないと、現在の体制のままでは、全学共通教育というのは非常に脆弱なまままで終始して、結局弱い部分が強い部分もだめにしてしまう。さっき電気器具の例えを申しましたけれども、一番弱い部分が壊れてしまうので、いくら10年保証されていたって、1年しかもたない部品がそこにあったのでは、結局その機械は1年しか使えないですね。それと同じで、共通教育は我々の分担ではないとか、私は専門にかかわるんだということでやっていると、結局大学教育、市大全体の教育力が落ちて、市大そのものの評価が下がるということになってくるので



はないか。専門も教養も教員の担当の別を設けないでやるんだというのが昔からの市大の理念ですけども、それは同時に、教養教育、共通教育も全員が担当するという意識を持つ必要があるのではないかと考えております。

そういう意味で、現在必要とされているのは、そういうことのちゃんと検討できるような全学的なFDとありますが、そういうものも私はFD、カリキュラム、あるいはカリキュラムを支える組織をどう変えるかという議論自体も、FDの中に大いに入るし、むしろそういうことこそが日本の大学で今後なされないと、日本の大学の教育力というのは上がらないのではないかと考えています。

【寺崎】大上段な言い方をするようですけど、FDは、意図的FDがなくなることが理想ではないかなと実は思っております。別の言い方をすると、FDが行われる舞台は大学そのものですけども、その大学というステージの中に実はFDが日常的に組み込まれるという状態が一番理想的だと思っております。

すなわち「大学文化の中に組み込まれたFD」という形になるのが一番いい。例えばアメリカに行った方の話を聞きますと、FDセンターってどこにありますかと聞いても、そんなのはありませんと言われる例がほとんどだというんですね。さらにいろいろ聞いてみると、「あ、ティーチング・アンド・ラーニングセンターですか、それはここです」というふうに思い当てる。それは教員も学生も使うことのできるティーチングとラーニングに関する支援のセンターだというんですね。そして、それ以外のところで、例えばカリキュラム改革の課題を考えるとといった別のプロジェクトが立つ。私は、そういうことの連鎖が実はFDであって、義務化して、プログラム化して、毎年繰り返してやるといった形態だけにこだわるのはやめるのが理想ではないかと実は思っているところでございます。

そういうように、大学文化の中に組み込まれたFDということを考えてみると、初めて私はFDというのをダイナミックに理解できるという気がするんです。例えばイギリスではFDという言葉はない、使わない。そのかわり全部SDすなわち、スタッフ・ディ

ベロップメントとしか言わないとかいうようなことがあります。

今のことと関連してもう1つ、アメリカの大学でFD、FDと絶えず問題になるのはどうしてか。あれの基盤には、苅谷剛彦という人が紹介していますが、教員と学生の間の契約関係があります。大学との契約上、学生はこれだけの学費を払う、それだから、教員はそれに対応してこれだけのことを教える、そういう約束事で動いていっている。だから、例えばシラバスは契約書の一部だということです。教員・学生関係が基本的にそうである場合には、FD、すなわち授業の仕方を改善していくというのは、恐らく教員にとって倫理的であると同時に契約上の義務になるんでしょうね。

しかし、日本の場合は主にそうになっておりませんので、その場合にどういう根拠によってFDをやっているか。やっぱりわざとらしいプログラムを立てざるを得ないということになります。そうすると、やはり長続きしないんじゃないかという気がいたします。

学生と教員の関係が今のままである以上、長続きするFDはなかなか生まれにくいと思います。しかし、なぜしなくてはいけないかということになると、さっき申したことが出てくるわけです。教員の職務として、我々は学生の自立に力を貸しているかという話になるということであると思います。

【司会】どうもありがとうございました。

フロアのほうからコミュニケーション・ペーパーでたくさんのご質問をいただきまして、寺崎先生からは、最初のお答えのところ、結構まとめてお答えいただいたのではないかとこのように思っております。つまり、そもそも大学教育とは何かということと、学生もいろいろ、例えば学習が受け身でないとか、いろいろ言われるわけですけども、そういうところ、イメージーションを高めるような教育方法ということで、学生に働きかける、もちろんそこに教員のいろんな役割とか、そういうものがあるのだろうと。あと、塩出先生のほうから、FDの目的といいますか目指すところは、大学の教育力の強化であると。また、それも寺崎先生からも同じような方向性のコメントをいただいたのではないかとこのように思っております。

では、フロアのほうからまたご質問をいただこうか



と思うのですが、どなたでも結構ですけれども、何かございましたら、拳手をお願いできますでしょうか。

司会のほうで、コミュニケーション・ペーパーをまとめましたけれども、もしかするとご質問の趣旨を取り違えていた可能性とかもありますので、そういうものもありましたらご指摘いただいて、ご質問等いただければと思いますけれども。

【寺崎】もしなければ、私から、さっき言い忘れた中で関連していることで補ってよろしいでしょうか。

【司会】はい、ではお願いします。

【寺崎】先ほど、学生たちを学力に応じて丁寧に指導していかなくてはいけないというふうに言ったのですが、それは全くそうだと思っています。ただ、そのやり方というのはいろいろあるというふうに思います。

1つは、やっぱり第一歩から指導していかなくてはいけない。さっきお見せしようと思って忘れていましたが、例えば今、私の大学ではこういうのを配っています（示す）。学習支援のためのリーフレットで、大学教育開発支援センターで「こういうのをつくらなきゃだめじゃないか」と、集まってこられたいろんな学部の先生方から話が出ましたので、「ではつくろうではありませんか」と言って、つくったんです。

「レポートとは」というのが、第1枚目の裏表です。2番目は「レポートの構成」。若い方たちが仕上げてくれましたので、1枚ごとに色を変えたほうがいいというカラーを変えました。序論と結論、本論と結論、こういうようなことです。「何枚程度」と先生が言ったときは上が1割増し、下が1割引きぐらいで考えればいい、とか書かれています。こういうことでも学生はすごく喜ぶんですね。3枚目が、また評判がよかったんですけど、「引用・参考とその表記方法」、これも、役に立ちましたというアンケートが多かった。最後は「メールのマナー」ということで、年上の人にメールを出すかもしれないけど、そのときはこういうマナーで作りなさい、といったことが書かれています。これにも学生は悩んでいるんですね。

これを出しまして、去年の暮れから廊下の隅に置いていただけなんですけど、実に、5,500部持っていかれてしまっていたというのです。これから12月、1月、レポートを出すころには1万部ぐらい出てしまうと思

います。1年生全員のゼミに配りたいから何十枚くださいという先生も出てくれました。

レポートって何なのか、テーマを決めることです、仮説を立てることですというふうなことが書いてあるのですが、そんなことは、学生は教わったことも聞いたこともないんですよ。レジュメと言ってもわからない。「レジュメとは何か」というのをこの次に出そうかと言っているんです。こういうような働きかけは例えば極めて重大なことで、特に高校全入が広がってくるとなおさら大事になってくるんじゃないでしょうか。きのう頼んで、4枚つづりのものをお見せしようと思って持ってきました。あとでゆっくりごらん下さい。

また理工系の先生方の場合、恐らく実験レポートをどう書くかと指導していらっしゃると思います。ひょっとしたら工学部と医学部と全然違うのかもしれませんが、共通の部分は何かを、お書きになればいいんです。こういうのをおつくりになること自体が、私はFDの一環だと思うんですね。またそういうふうにFDを理解したほうがいいというふうに思います。

【塩出】FDとか改革ということですが、1つ思っていますのは、一応すべて大学が自主的に競争しているといいますが、そういう自由な環境で考えているんだということになっていますけれども、結局出発点は外発的といいますが、文部科学省のいろんなことであるとか、外発的にあるからやるということが実情ではないかと思います。それに関連して、寺崎先生の資料に、私もそれを読んで非常に感銘を受けた本の、特に印象に残っている箇所の引用があります。

それは資料の2番目の、矢田俊文という、北九州市立大学の改革をされた、現在も学長をしておられると思いますけど、その方が書かれていることで、要するに、文部科学省の政策を無批判に導入するのではなくて、また、抵抗するわけでもなくて、北九州市立大学の教育をよくするために必要と思われるところは大胆にやるけれども、それ以外のところは適当に聞き流すというふうに大胆におっしゃっているんですね。現在のような流れの中では、いろんなことに組み込まざるを得ないわけですが、それは大阪市立大学の教育にとって何が必要であるかと、よくするために何

が必要であるかということを考えて、その上でそれを積極的にやって、あとのことはある意味で聞き流す、あるいはリップサービスで済ましておくという、そういう姿勢が私は必要なのではないかと。したがって、そういう意味でも、大阪市立大学の教育の現状をはっきり把握して、何が必要なのか、どこが一番弱いのかということを確認する作業というのが一番必要ではないか。

コメンテーターを引き受けたので、矢野先生から、このセンターがつくっておられる「大学教育」という研究誌を送っていただいたのですけれども、その中に随分、市大の教育に関するいろんな調査、問題点の指摘があって、私は読ませていただいて大変役に立った。したがって、この市大においてもそういう研究、調査、データが集まっているので、やはりこれを生かして、そこから大学全体としてどこを強化するのか、どうするのかということを考えていくということが第一の出発点ではないか、そういう意味で、センターの機能、役割というのは非常に今後も大きいものがあるということを、論文を読ませていただいて私は痛感した次第です。

【寺崎】矢田先生の『北九州市立大学改革物語』というご本は出たばかりですけど、非常におもしろいです。変な表現ですが、ぬけぬけといろんなことを書いてあります。ぬけぬけと、というのは、悪いことは聞き流すという意味で、全部従うわけじゃない。大学に必要なことは断固やるんです。痛かな本です。

教養教育が劣化しているということに気づかれるんですね。その上で何をやるか。専任40人の基盤教育センターづくりで、この問題にばっと対応しておられるわけです。これは大変なことだと思います。特に公立大学では、専任は純粋に8人増やしたと書いておられます。あとは学内の専任の先生が対応されたんだと思うんですけど、そういうこともなさるし、学生支援、留学生支援その他、これは全国モデルになったと。たしかランキングで1位になられたんですね。やっぱり頑張ろうと思えばできるというふうに思いますね。

【司会】どうもありがとうございます。

いかがでしょうか、もしフロアのほうから、話の最初のほうではレポートの書き方とかの話も出ていまし

て、このあたりの話は大阪市大でも、ちまたでも、またこういう場所でもよく議論になるような話でもございます。それから、北九州市立大学の矢田先生がお書きになっている、こういうような感じの話として、文部科学省とかそういう学外とどういうふうにおつき合いをしつつ、どう大学をつくるか、これももう常に差し迫っている課題なのではないかと思しますので、それぞれ先生方も日々いろんなことを思ったり感じたりしておられるかと思えますけれども。

それでは、海老根先生、お願いします。

【海老根】今言われたこととちょっと別のことなんです、いいですかね。

高校から博士課程に至るまで、非常に一貫して考えなきゃいけないというお話が第2点のところでも出てきたと思うんです。そのときの、の1のところですか、一方で高校との接続というのが不可欠になっていると。ユニバーサル化している中では、要するに、高校生が今どこまで学んでいるか、高校でやってきたことを前提にして初年次教育など、その他もろもろ考えていかなきゃいけないというお話がありました。他方で、前期課程、大学院博士課程の前期と後期の話なんですね、僕がちょっと関心があるのは。

その前期に関しては、もうこれは要するに後期の前段階ではないと。つまり学部の延長線上として考えざるを得ない状況があって、具体的には修士課程に行った学生の多くが企業に就職していくということで、修士課程というのは博士課程に進む、研究職を目指す人のための教育だけでなく、ほかのほうに行く人のことも考えてカリキュラムをつくらなきゃいけないというお話だったんじゃないかと思うんです。その過程で、次に僕が関心あるのは、そうやってきた場合に、前期博士課程と後期博士課程との関係というのも変わってくると思うんですね。後期博士課程が研究者養成を目指す、比較的目指す傾向が強いときに、そういうので博士課程前期・後期一貫して教育するという列と、修士でどんどん出ていくという人にも対応しなきゃいけないということがあって、後期博士課程と前期博士課程の関係というのはそこでどう考えればいいのかということと、その中で、うまいことその関係をやっているような事例とか、もしあったら教えてほし

いなと思います。

【寺崎】いいことを聞いていただきました。さっきここを飛ばして話していましたので、概説しかできませんでした。

実は、前期課程に関して言うと、これこそ私はスクーリングが必要だと思っています。人文・社会科学系では特にそうだと思います。前期課程教育の非スクーリング化が放置され、単位制度だけが形骸化して残っている、修士論文があるだけという、この状態に対して非常に辛口のことを言ってくれているのは、さっき言った建築史の先生のほかに、ノーベル賞を取った利根川進氏ですね。彼が、非常に痛切な言葉を吐いています。

自分は京都大学理学部に進んだ。するといきなり、うちの基本的精神は自由の学府をつくっていくことだといわれ、自由に勉強しろと言われたというんですね。ところが、自分が行ったアメリカの大学では、驚くべきことに5科目の授業を聞けと言われたので、びっくりしながらも授業を聞いていた。「聞いているうちにやっとわかりましたね」と。何がわかったかというところ、1年ぐらい5種類の講義を聞いていると、自分が研究の中で学界のどの分野のどういうテーマをやろうとしているかという位置づけがはっきりわかった。やっと実験器具にさわらせてもらったのは修士の2年生の後半からだったということです。彼ははっきり書いています、「日本の大学院にディシプリンはないですね」と。

文科系になるとそれはもっとひどくて、さっきも言ったように、修士が終わるまで1度も先生の話を受けないこともある。自分の経験で言いますと、先生方に4人の修士の学生が頼み込んで、やっと4人の教授の時間を合わせてもらって修士論文の発表をやって意見を聞きました。これが唯一のチャンスでした。その程度なんですよ。ですから私は、修士のところはきちんと計画的にいわゆるカリキュラム化する必要があると思います。スクーリングが必要だと思っています。

それから、ドクターのほう、後期課程、これはさっきも言ったように、何もステップがないから、今、中教審ですらステップをつくれと言っているわけですね。それで、アメリカの大学院は例えばゼネラルエグザムというのがあるわけですね、2年生の終わりが3

年生の初めに。このゼネラルエグザミネーションに合格した者だけがドクターのアプリカント（候補生）になれる。しかし、合格しないとどうしてもその上には行けない。ああいうのがないというのは不思議でしょうがないとアメリカの友達は言います。日本ではドクターはどうしているんだ、何の試験もないじゃないかと。一方、先生からは、3年ぐらいで博士になれると思うなんて言われることだってしょっちゅうあるわけですね。

それから、私のところのセンターに、いろんな大学の大学院を終わった人たちが来ますけどね、聞いてみると、「私の出身大学院では、絶対取れません」と言っています。どうしてかということ、自分の先生が、博士なんてすぐなれるもんじゃないよしか言われぬ。3年ぐらいで取れるなんてとんでもないことだと。ご自分も持ってないんです。ですから、あきらめてます、と。これは。全くの「非課程化」です。ですから、それは直さなくてはいいないだろうと思います。

修士のところをスクーリング化したほうがいいのかというのは、さっきも申しましたように、みんながドクターへ行くわけではないからです。修士そのものがそうになってきているわけです。やっぱりここは私は課程化が必要だというふうに思いますね。

【司会】どうもありがとうございます。

非常に重要なお質問をいただいたのではないかと考えております。

超過ぎみではありますが、よろしければ、もうおひとつ方ぐらいご質問いただくこともできるかと思いますが、いかがでしょうか。どのようなことでも結構ですけれども。

【荻尾】今、利根川先生の京大理学部の場合が出ていたけれども、非常に特殊な例だと思われます。本学の理学部ではそのような教育はしていなくて（笑声）もっときちんとカリキュラムが組まれていて、修士課程1年ではこれだけの授業を取りなさい、そういう授業が行われていますので、京大とほかの大学を比較してはいけないと思います。コメントです。

【司会】済みません、ご所属とお名前をお願いしますと言おうと思っていたのですけれども。今のご発言は理学研究科の荻尾先生でした。先ほどの方は文学研究

科の海老根先生です。

では、寺崎先生、塩出先生、何か最後におっしゃりたいことがございましたら、よろしくお願いいたします。

【塩出】一言あるとすれば、せっかく大学教育研究センターというのをつくって、定員も配置されているので、もう少しいろんなところで積極的に活用する方向というのを考えていただければいいのではないかと考えております。

【寺崎】余計なことですが、今、荻尾先生のおっしゃったこと、そういう例を先生方に伺って、センターの紀要に載せさせていただいたらどうですか。修士課程教育の課程化というのは実はすごい課題なんですよ、

求められているのです。やってますって証拠を出せば一番いいと思いますね。先生、学科はどちらでいらっしゃいますか。

【荻尾】物理学科です。

【司会】どうもありがとうございました。

センターの兼任研究員の先生でもいらっしゃるの、ぜひ書いていただこうと思います。よろしくお願いいたします。

特に最後のほうは、我々も身を引き締めなきゃいけないコメント、励ましをいただいたかと思います。

では、とりあえず、本日の教育改革シンポジウムのディスカッションはこれまでとさせていただきます。